

326

332

第14回講演会速記録

日露協会編

国立国会図書館



始



H3H-13

326  
332

正九年八月廿五日

第十四回講演會速記錄

日  
露  
協  
會

326-372



# 勞農露國の現狀

大阪毎日  
新聞記者

布施勝治氏

大正  
9.10.16  
寄贈

過激派の露國に就いて餘り赤裸々にお話を致しますると、過激主義の宣傳をするなど云ふ非難を、動もすると受けることがあるのであります、併ながら私は如何なる過激思想でも、識者に取りましては何等危険がないのみならず、寧ろ識者はあらゆる思想を研究し、其思想の跋扈して居る國の内情を知ることが最も緊切なる事であると信ずるのであります、故に此夕は過激派露西亞の内容に就て出来る丈け赤裸々にお話致したいと思ふのであります、唯遺憾乍ら私は生來非常に訥辯でありまして、思ふ通りの何分の一も話し得る

10  
金寄贈本

かと懸念して居ります、豫め此の點お含みを願ひます。

私は新聞記者として露國方面の報道を擔當して以來最早約十年になりますが、既往を願れば私は露西亞方面専門の新聞記者として、非常に幸運であつたのであります。私が始めて露國に参りました當時即ち十年前には、尙ほザール政治が全盛を極めて居りました、而して露國に居る間に歐洲大戦争が勃發し、其後間もなくロマノフ王朝が傾いて三月革命が起り、其革命が更に進展して今回の社會革命となり遂に、過激派が政權を握ることになりました、其千變萬化の露國を視ることを得たのは、新聞記者として非常に幸運であつたと云はなければなりません。戦争前ベトログラードに居りました外國人の新聞記者は非常に僅かでありました。先づタイムスのウイルトン氏、クロニクルのウイリヤムス氏、佛國のノドー氏と云ふやうな五本の指で算ふるに過ぎない程少數でありました、此等の露國専門の歐米の新聞記者はザール全盛

時代から戦争を経て、革命の始まる迄露國に居りましたけれども、長い間露國に居る内に知己が出来、其知己がブルジョア階級に多かつたので嚴格に言へば新聞記者は不偏不黨でなければならぬのであります、自然露國政争の渦中に投じ反過激派を扶けて過激派に當り、それが爲めに過激派が政權を取ると皆露國を去らなければならぬことになり、且つ去つた後は再び這入ることが出来ないことになりました。私は此等の歐米記者に比すれば後輩であります、露國に居る間終始何處迄も政争の渦中に投ずることを慎み、革命中も不偏不黨で常に局外の地位に立つて公平なる觀察を下す方針を執つて居りました。千九百十八年の春、獨逸軍がベトログラードに肉薄して來ました時に一先づ露國を去つたのですが、間もなく露國に引還へす決心を定めたのであります。但だ赤露入りの計畫は甚だ手間がかつたのであります、兎も角再び過激派露國に這入ることが出来、今日の赤露觀察を終ることが出

來たのであります、要するに革命前後を通じ露國の千變萬化の政情を視ることが出來たのは、外國の不偏不黨の新聞記者として恐くは私一人であらうと思ふのであります。此點私が特に露國専門の記者として、非常に幸運であつた所以であります。唯茲に一つ皆さんの御了解を得て置きたいことは、露國問題は過激思想を中心として居りますので、此の問題の研究に當るものは兎角誤解を受けることがあると云ふことであります。で誰でも露國に這入りますと過激派から『反過激派乃至は帝國主義者の廻し者ではないか』と云ふ嫌疑を受けるのであります。然るに露國を出ますと反對に動もすれば世間から過激的色彩を帯びて歸つて來たではないかと云ふ誤解を受けるのであります。が、私は何處迄も新聞記者としての職責を盡くすのを目的とし又あくまで不偏不黨、唯だ一に露國の真相を傳へやうと云ふ考へで進んだのであります。私は過激派に對しても何等好意を持たず、又敵意も持たずと云ふ方針で通

信をして來たのであります。どうか此點特に皆さんの御了解を得て置きたいのであります。

私が日本を出まして歐羅巴を廻つて西から露國に入らうと云ふ計畫を立てましたのは昨年春でありまして、露國の西隣りの芬蘭に着きましたのは昨年九月のことでありました、芬蘭とエストニヤを根據として色々露國に入る計畫を廻らしましたが、過激派は當初から私に對して非常に警戒を張りまして容易に入國を許して呉れませぬ。私は最初から露國の政争には不偏不黨の新聞記者でやつて來ましたのですから恨みを受ける理由はない。又敵意を持たるゝ理由はないのであります。が、過激派から見れば矢張私は英佛の從來露國に長く居つた。新聞記者と同じく反過激派に關係のある者と觀へたのであります。そこで私はエストニヤの軍用無線電信を利用して過激派の外務卿に交渉をしました時も、外務卿は之に答へて『日本が過激派に對する戦争を止

六  
めた曉に於て君と莫斯科で逢ふことを悦ぶ』と云ふ体裁の良い拒絶を返電して来たのであります、其後機會のある毎に過激派當局に交渉しましたが、何時でも『前に言つた返答を繰返へすの外はない』と云ふ返答でありました。爾來私は空しくエストニアに於て一年間機會を待たざるを得なかつたのであります、一年間北歐羅巴の淋しい片田舎にジツと待つと云ふことは非常の苦痛でありました、けれども私は始めから過激派の露國に無斷で這入ることは非常に危険である、どうしても過激派當局の承諾を得て後に這入ると云ふ大體の方針でありました、過激派の方から外務卿の名を以て『莫斯科にやつて來い』と云ふ無線電信が來たのは恰度一年待つた後の今年三月のことでありました。ソコデ皆さんはなぜ一年間も通うさなかつたものを此三月になつて通うしたのかと云ふ疑問をお起しになると思ひます。それは外でもありません、過激派露西亞は此春迄は從來世間に傳へられた如く饑饉、寒氣、國民の不平、傳

染病の流行其他で非常に慘憺たるものであつた。そこで過激派露國に多少同情を持つて居るか若くは持たなくとも從來露國の事情を知らず、又た露語も分らぬ者には一寸位見られても良いと云ふ方針で若干歐米記者を通じたのであります、多少長く露國に居り露語にも通じ露國人を諒解して居る新聞記者に見られては大變だと云ふので容易に入國を許しませんでした。所が此春になつて露國の内情は急に善くなりました。内憂外患も一段落が附いて是迄の破壊時代から創業時代に移るこゝになりました。そこで是ならば不偏不黨の新聞記者に見せても耻しくないと云ふ見當が附いたらしいソレで、愈々私にも來ても良いと云ふことになつたのであります。

そこで私は今年の四月三日にエストニアの首府レワールを出てペトログラードを通り莫斯科に這入つたのであります。這入つて見ますと成程世間に傳つて居りました如く莫斯科の大きな店は皆な閉ざれてあります、町を歩く

八  
市民を見ても皆な前と變つて穢ない服装をして居りますので見るから殺風景  
であります。けれども少しく仔細に觀ますと秩序は整然として居る。(茲に私  
が秩序と申しますのは主にも警察的の秩序を申すのであります)夜中外出し  
ても何等危険はありません。莫斯科に這入りまして私は先づ二年前過激派が  
政權を握つた當座の露國と、政權を握つて二年経つた今日の狀態とを比較し  
て驚いたのであります。二年前は所謂過激派の破壊時代でありましたから、政  
治、經濟、軍事、教育各方面總て混沌たるものでありましたが、今日はもう混沌  
と云ふ文字を使ふことは出来ません。若し『安定』と云ふ詞の條件が、……例  
へば或物質が安定して居ると云ふことの條件が(一)其物の土臺が鞏固であつ  
て(二)其上に立つて居る大黒柱が確かりして居ると云ふ二つにあるとしたな  
らば、露國今日の國內の狀態は兎に角安定して居ると言つても宜しいと思ふ  
のであります。私は露國を出た後西伯利を過ぎ蒙古を經由し支那を通つて來

たのであります、で私が支那へ入りました時私は露國と支那とを比較して  
『此の安定問題に思ひ及んだのであります』支那と露國は始終ゴタゴタが  
ある點で非常に似て居ります。が同時に又極端に相反して居る點もあります。  
即ち露國の今日はサウエイトと云ふ政權の實體が根柢を固めて土臺となりそ  
の上にレーニンと云ふ大黒柱が確乎立つて居ります。然るに私が蒙古を経て  
張家口に入りますと、支那では北京政變の眞際中でありました。で支那は南  
北の離反、督軍の轄據等で土臺に龜裂があり、而して肝腎の大黒柱たる大統  
領の權威が確かりして居りませんので、私は此の點に於て露國は『安定』で  
支那は『不安定』であると感じたのであります尤も斯る簡單に申しました丈  
けでは、露國の内情は甚だ良いやうに思はれますが、露國は唯だ土臺が堅く  
て大黒柱が確かりして居る丈で、其家の内の造作はまだ不完全で、屋  
根も窓も出來上つて居らぬ様な狀態であります。ですから雨が降れば漏る、

風が吹けば吹通ほすので、國民は今尙ほ塗炭の苦みに惱んで居るのであります。之に反して支那は土臺はグラつき大黒柱が搖いても造作は格別壞れて居りませんから、國民は政變が起るともそれ程困らないのであります。と云ふやうな比較對照をやつたこともあります。

儲過激派露國の造作の不出來なる點、即ち國民が何う云ふ點で困つて居るかと申しますと、先づ物資の缺乏と交通機關が混亂して鐵道の輸送力が非常に減退したと云ふ二つをあげなければなりません。何しろ露國は革命前既に戰爭で疲弊し、物資が缺乏して居つたのであります。其上に革命が二度も續き、而も革命以來最近三四年の間は外國から殆んど物資が這入つて居らない。平時の露國は毎年外國から十五億留の貨物を入れて居つたのであります、其貨物が這入らなくなつたのでありますから、物資の缺乏は思ひ遣られるのであります。加之過激派は政權奪取の當初舊來の經濟機關を片端から破壊しま

した、尤もその後創業建設もやりましたが、大體に於て經濟機關は今尙ほ混沌状態にあり、工業一般非常に製造力が減つて居りまして、此等の關係から國內の物資の缺乏は驚くべき程度に達したのであります。例へば莫斯科に往きますと、殊に私の如く飛入りの者は、何か買はうと思ひましても、殆ど何も買ふことが出來ませぬ。商店は皆な店を閉ぢて居る、商品は過激派政府が國有にして大部分は穀物交換の目的で田舎に廻はして居ります。で都會で何か買ふと云ふことは一大難事であります。又莫斯科を出て鐵道で旅行する途中でも(莫斯科とウォルガ河の間だつたと思ひますがあの邊で)物を買はうと思つても食鹽と交換でなければ何一つ賣つてくれませぬ。鹽をコップ一杯に入れて出すと卵十個さか牛乳一罈とか云ふ具合に交換することが出來ますが、金では何物も買ふことは出來ませぬ。又都會は左程でもありませんが田舎に行くとき衣服殊に靴が甚だしく缺乏して、女共が裸足で歩いて居るのが非常に



多いのであります。私はツクム露國の國民なればこそ此困苦缺乏に堪へるので、外の國民ならばもう夙くにやり切れずして、爆發したであらうと思つたのであります。莫斯科には<sup>いみじ</sup>穀の入つた麵麩とか粟の入つた粥はあります。が牛肉卵のやうな食糧は容易に手に入りません。従つて普通の生活に慣れて居る者が突然露國に這入ると饑饉は感じませぬが、何かと缺乏に困るのであります。英佛人などが露國に來ると大概は一ヶ月内外で閉口して歸ります。私も莫斯科に二ヶ月居り且つ、莫斯科を出てから旅に二ヶ月費やしましたが、其間具さに缺乏と戦ひましたので、日本につきましました時は身心共に疲勞困憊の極に陥つたのであります。それから推して露國民は何處迄困苦缺乏に堪へるのか實に恐るべき國民であると云ふ感がしたのであります。

次にお話しなければならぬ事は交通諸機關の紊亂であります。露國の交通は主にも鐵道であります。此鐵道は時々新聞紙上で報道致しました通り汽

罐車及車輛が戦争と革命毎に破壊される、而して各工場の修繕力が破壊率より尠ないのでありますから、日が経てば經つ程運轉し得る汽罐車及車輛が減ずるのであります。斯う云ふ状態が何年も何年も續いて來たので、今日の鐵道状態は實に慘憺たるものであります。けれども時折り歐羅巴各方面に傳はる極端なる悲觀材料、例へば『露國の鐵道は此儘で行くと何月何日頃に全國を通じてバツタリ運轉停止の外ない』など云ふ如き説は眉唾ものであります。私が實際視た所に依りまして、それ程極端に悲觀すべき状態ではありませぬ。私はレワールからベトログラードを通つて莫斯科に行き、又ウオルガ沿道を通つて西伯利を経て來たのですが、何處の鐵道でも運轉を全然停止して居る所はありません。モスコとウエルフネウジンスクとの間にも一週に二三次回列車運轉して居ります。殊に驚きましたのはコルチャツクが退却の際に破壊して遁げました西伯利各地の鐵橋が皆修繕が完成して列車が無事に通つて居

ることであり、又レールから露國に入る途中のヤンブルグの如きユヂ  
ニッチ軍が露都進撃のときに、修繕が間に合はず遂に露都攻略の機会を遁し  
たのですが、それが過激派の手で立派に修繕され今では過激派政府と歐羅巴  
列國との交通上重要地點となつて居るのであります。

勿論物資の缺乏も鐵道の紊亂も他國に比すれば甚たしく悲觀すべき状態に  
在るのであります、けれども(第一)露國人は困苦缺乏に堪へる國民であり、  
又(第二)露國は國土が廣くて天産に富んで居りますのでその耐久力は驚ろく  
べき程強いので普通の國ならばもう到底駄目と云ふ様な場合でも露國は持ち  
こたえるのであります。平たい例を取つて言へば露國は『大きな米櫃』であり  
ます、米が無い無いと申しても米櫃が大きいから隅々をほじくりますると一  
ト月や二ヶ月支へる分が出て參ります、又今一つの例を以て申せば露國は『粗  
雑なる機械』であります、若し時計の如き精微な機械でありましたならば一

寸の故障でも運轉を中止致しますが、露國はズウ體の大きい粗雑なる機械で  
ありますから、少し位故障があつてもガタ／＼言はせながらも動き得るので  
あります、あの大きな機械がバツタリ止まる迄にはまだ／＼幾多の日子を要  
することゝ思ふのであります。

次に列國が之れまで過激派露國に對して執りました政策は、私の見る所大  
體二つに分けることが出来ると思ひます。

一つは反過激派を助け露國內に侵入して過激派の政權を倒すこと、  
今一つは封鎖政策で缺乏攻めを以て過激派政府を内部から倒すこと……の  
二つであります、露國に對する侵略政策は如何なる名將が出て、あの廣い  
國を外から攻入つて留めを刺すことは容易ならぬことであり、那翁が露  
國遠征に失敗したのを見ても明かだ、反過激派の後押として過激派を倒す政  
策は、昨年コルチャツクの敗れ、デニキンの失敗、ユヂニッチ軍の潰亂以來

全然失敗に終り列強は一先づ此の侵略政策を抛棄したものと見て良からうと思ひます、けれども列國は今尙ほ封鎖政策を續けて居るやうでありますが露國は前に申した大きな米櫃で又粗雜なる機械であります、大きな米櫃が一粒の米の無くなり大きな器械がバツタリ停止する迄封鎖を續けることは非常に困難なる政策であります、或は成功の見込のない不可能なる政策ではないかとも思ふのであります、然らば如何にして過激派に當るべきか是に民族政策と云ふ一策があります。

赤露に對する民族政策は各方面に涉つて小規模に行はれて居る、けれども大概は成功して居ります、例へば芬蘭の獨立を始め、エストリヤ、リシアニヤの獨立、高加索方面にはジョルヂア、アゼルバイヂヤンの獨立、中央亞細亞ではブハラ、ヒーヅが分離しました、其他驚くべきは烏拉爾の近所に韃靼共和國、バシキール共和國と云ふやうな國(?) 露國の國內に出來て居りま

す、私の申しまする民族政策は主もに大露西亞人と猶太人を根抵として成つて居る過激派露國を、他の異種民族を助けてその勢力を削らうと云ふ政策を指すのであります、此政策はコルチャツク、デニキンを助けた政策に比すれば小規模でありますけれども大概皆を成功して居るのであります、シテ此政策の成功しました所以は幾多ありますが、(第一) 此政策に對しては當面の對手たる過激派露西亞も民族自決方針を自から標榜して居る位でありますので無暗に反抗することが出來ず否な私が屢々新聞紙上で報道しました通りレニンは今骨休め政策を採て居りますので過激派露西亞は露國內の各種民族の分離乃至獨立運動に對して、抵抗せずして却て之を進んで之れを承認すると云ふ態度に出て居ります、何しろ露國近年の國難は戰爭に次ぐに革命を以てしたので國民の困苦缺乏は實に名狀すべからざるものでありますので斯かる状態が餘り長く續きますると如何に困苦缺乏に堪へる露國民と雖もいつかは

堪え切れずして自暴自棄となるかも知れませぬ、又實際今日の過激派露國の内情は積極的に國外に手を伸ばす丈けの力がありませぬ、レーニンの世界革命は今到底斷行することが出来ませぬ、そこでレーニンは今の處『資本世界と休戦』を結んで『骨休』をやる、さうして其間に國內の經濟状態を改善し國力を充實し、而して後改めて『世界革命政策』をやらうと云ふ考を持つて居るらしいのであります、私はレーニンに逢ひまして『勞農政府當面の急務は何であるか』と尋ねました處が、レーニンは之に答へて『先づ第一に波蘭の地主と資本家とを擊破すること、第二は世界各國と鞏固なる平和を締結すること、第三は國內の經濟状態を改善することにある』と言ひました、之れに依つて察すると彼の當面の最も大なる目的は國內の經濟状態を改善して國力の充實をはかる點に在るのであります、然らばレーニンは如何にして資本世界と鞏固なる平和干繫を打ち建てるか、それに就いて彼の按出しました政

策は例の『緩衝政策』で露國の周圍に小さい國を澤山拵へ其等の國を以て列強の打撃を緩和するのであります、去年の秋頃から彼は此計畫の實行に着手し、たらしいのです、でありますから過激派露西亞は民族政策に反抗しないのみならず却て自らそれに乗つて居ります、處が幸か不幸か東部露國に於ては民族政策を行ふべき異種民族がありませぬ、ありましてもブリヤート族の六十萬位に過ぎませぬ、そのブリヤート族も一ヶ所に六十萬が塊つてても居れば多少民族政策の地盤になります、此の民族は西伯利の各地に散在して居りますので統一することが出来ませぬ、それでありまして東部西伯利に於ける日本は英佛の西露でやつて居る様な民族政策を行ふことが出来ませぬ、尤もセミヨフは此の民族政策をやらうとして居るのですが、其地盤がコザックとブリヤートで、十分に便る丈けの力でありませぬので、東部露國に於ける民族政策は愈々やり悪いのであります、尤も私が莫斯科に居りましたとき

確かに看取することが出来ましたのは、勞農政府が『武力を以て露國の内政に干渉し得る國は日本一國である、それ以外にはない、日本に於ける社會主義は微力であり、軍隊も指揮官の命令一つで何處迄も進む國である』と云ふことから日本を最も深く恐れてゐることでありました、私が莫斯科に入りましたときは恰度尼港事件の真相が莫斯科政府に漏れて來た當時でありましたが、莫斯科政府は日本が尼港事件を口實として露國に對し積極的行動を執りはしないかと心配して居つたのであります、そこでレーニンは何とかして之を緩和しなければならぬ、今、日本に東から出られては大變である、又實際大變であつたのであります、私が西伯利を通過しました途中でも毎日東の方から波蘭に向けて赤色軍を送つて居りまして、私がウエルフネウジンスクに參つたときには、赤色西伯利は軍事上殆んど空っぽになつてゐたのであります。そこでレーニンは何とかして東方の憂を除かなければならぬといふので、例

の『極東緩衝國』を設ける方針になり今度私が莫斯科に着きましたと殆ど同時頃にレーニンが其決心をしたのであります、私がレーニンに逢ひましたときに、レーニンが眞先きに私に向つて『マア緩衝國を拵へたからそれで良いではないか』と云ふたのであります、極東には民族政策を行ふべき地盤はない代りに、過激派の方から日本を恐るゝの餘り其壓迫を緩和し骨休めをする爲めに自ら進んで人工的の緩衝國を設立しました、もとより之れは一時的の政策に過ぎませぬ、レーニンはたゞ緩衝國に依つて日本との平和干繋を築き以て骨休めを爲し國力を充實し然る後に捲土重來をやらうといふ下心であることは申すまでもありません、併し此緩衝國はレーニンに取つては骨休めの一策たると同時に、日本に取つても是は利用すべきものではないか、レーニンに脊負投げを喰はす爲めには一時レーニンの手に乗らなければならぬではないか、此の邊は皆様の特に

慎重なる御考慮を煩はさなければならぬ當面の問題と思ふのであります。もう一つ過激派露國に對してロイドジョージの案出した政策は、『過激派をBourgeois化する策であります。ロイドジョージはズツト前から過激派露國に對しては侵略政策は駄目である、封鎖政策も利目がない、そこで過激派政權を打破するにはその内輪に手を入れて『過激派をブルジョア化』させる他ないと是丈け申した丈けでは御了解にならぬかと存じますが——ロイドジョージは露國の購買組合を相手として通商貿易を開始し、勞農政府をヌキにして露國の經濟機關と商賣をする、そして購買組合を通じて、レーニンが折角過激化したる露國の經濟界を通商貿易の力でブルジョア化させる……』と云ふ政策を採つたのであります、是は實際露國の内情を餘程研究して立てた政策と思ひます、即ち露國に於けるコオペラチーブは戰前に於ても戰爭中も、又過激派が政權を取つてからでも終始間斷なき發達を續けました、何分コオペラチ

ーブは表面營利を目的とせず組合員相互の利益を目的としたものでありますから過激派から見ても其主義に相反して居りませぬ、従つて過激派と雖も之に對しては思ひ切つて鉈を揮ふことは出来ませぬ、そこで過激派が政權を握つて以來總ての舊來の經濟機關は打破されましたが、コオペラチーブ丈けは打破されざるのみならず、反過激派が先を争ふて之に加入しましたので益々大きな機關となりました、と同時にコオペラチーブは逐次反過激派の色彩を帯び又遂には反過激運動の機關ともなりかけたのであります、此の事情を能く調べたロイドジョージはコオペラチーブと手を握つて内部より過激派をブルジョア化させる、換言すれば主として穩和社會黨出身のコオペラチーブの幹部連中を以てレーニンやトロツキーに取つて代はらせやうと云ふ様な政策を採つたのでありますけれども、ロイドジョージが此の政策をもう一年早く試みたならば或は成功を擧げたかも知れず、遅くとも去年の春頃此政策を執

つたならば過激派支府は餘程困つたのでありますが、過激派政府は昨年中にコオヘラチーブ乗取りの策を試みましたが、尤も過激派はコオヘラチーブの機關に向つて主義上拳骨を揮ふことが出来ません、そこで過激派側の労働者をコオヘラチーブの中に入れ。之を搦手から段々占領して遂には幹部の椅子の若干を過激派の手で占めるやうに致しました、そこでロイドジョージが勞農政府を抜きにしてコオヘラチーブと手を握るつもりで對露通商を開かうとやり出しますと、コオヘラチーブの代表者として倫敦に來ましたのは勞農政府の商工卿クラインでありました、それで結局ロイドジョージの勞農政府をヌキにしての對露通商政策は失敗したので、流石のロイドジョージも一寸レーニンの爲め背負投げを喰はされたのであります、併しクラインがコオヘラチーブの代表者として來た以上は是と交渉しなければならぬ、六月初めロイドジョージは澁々ながらクラインと兎に角交渉を進めることになつた

のであります。

露國との通商問題は是から尙幾多の曲折を経るであらうと思ひますが、過激派の政權が何か突發的の事變で覆へるやうなことがなければ、晚かれ早かれ何等かの形式で過激派露國との通商が開けると見なければならぬと思ひます、西歐諸國が露國から穀物の供給を受けることが出来ない爲めに經濟的に米國から壓迫される、故にどうしても露國と通商貿易を開かなければならぬ、同時に又露國も物資の缺乏極度に達して居りますので、一刻も早く外國から貨物の供給を受けなければならぬ、で私はレーニンに逢ひました時彼に「露國は露國の物資丈で經濟の回復を圖り得るか、換言すれば外國の貨物供給なしでやつて往けるか」と尋ねました所が、あの剛情なレーニンも非常に正直に『無論露國は天産物に富み國土が大きいから自給自足でやつて往ける、けれどもそれでは經濟上の回復に非常に多くの時間を要する』と答へました。

之れを言ひかへれば外國の貨物を受けなければやり悪いと云ふことになりま  
す、でありますから歐米と赤露との間には早晚或る程度の貿易が開かれる  
ものと見るべく、従つて日本も露國との通商開始に付いて今から相當の用意  
がなければならぬ、殊に貴協會に於きましても充分御劃策なさらなければな  
らぬことであらうと考へるのであります。

但し此先き露國と通商貿易が開始され、又緩衝國が出来、レーニンの骨休  
め政策に依つて比較的安泰な時期が來るとしましてもそれは極く短い時期の  
ことでありまして、露國を中心とした國際關係は今後幾多波瀾を重ねること  
は疑を容れないことでありまして、實際レーニン等に逢ふて親しく其抱懷する  
所を叩き、過激派政府のやり口を目撃し、第三インターナショナル等の活躍  
振りを見ますと、レーニン等の野心は中々遠大なもので將來恐るべきもので  
あることを思はなければなりません、彼等は國際主義を唱へ四海同胞と云ふ

やうな美しいモットーを口にして居りますが、實際は國際主義を利用して露  
國を中心として世界を征服しやうと云ふ政策に外ならぬのであります、第三  
インターナショナルの如きは全く露國を根據としてのレーニンの世界統一策  
の一機關に外ならぬのであります、二三日前大毎及東日紙上にも載せました  
『過激派の世界地圖』を見ましても彼等の世界地圖には國境がなく、唯だ赤と  
白との二つの彩色しか用ひて居りません、彼等は露國を中心として世界を赤  
くしやう、世界を征服しやうと云ふのであります、殊に赤色軍の編制教育等  
のやり方を見ても彼等の野心が如何に深く且つ遠大であるかと云ふことが分  
かるのであります。

赤色軍の編制と教育に付いて聊か所見を述べたいと思ひます、初め過激派  
が政權を握りました當時、過激派幹部内には軍隊の編制に就いて二つの意見  
がありました、大多數は正規の軍隊は過激派露國には到底出来ない、何しろツ



イ昨今までザール軍隊の破壊に大々の蠻勇を振つて來たのである、破壊した手で直ぐ様建設に着手しやうとしても到底見込みがない、故に今後の軍備の方針はバルチザン主義より外にない、即ち一定の軍隊を作らず、其代りに元のザール軍隊から出た兵卒が、各自鐵砲を擔いで家に還つてバルチザンになるさうして一朝事が起れば村は村、町は町に之等のバルチザンが寄り集つて、地方々々で百姓一揆をおこして敵を襲撃する、例へば獨逸軍が露國に侵入して來たならば、莫斯科まで獨逸軍を通うしてやる(其時分まだ獨逸との講和が成立つて居りませぬでした)勞農政府は烏拉爾邊へ遁げる、然る後、田舎に還つて居る百姓はバルチザンになつて獨逸軍の後方の輸送路を攻撃する、さうすると那翁軍が負けたやうに獨逸軍も結局敗走するに相違ないと云ふて當時政權を分擔して居りました非社會革命黨は勿論過激派の大多數もバルチザン政策を主張したのであります、殊に社會革命黨は元來田舎の百姓間に、地盤を

持つて居りますので、百姓が武器を持つて還へるのは何よりの名策であるのであくまでバルチザン説を唱へたのであります。

然るにトロツキー一派は斷々乎として之に反對しました、若しバルチザン政策を採つたならば社會革命黨にしてやられる、之に對抗するには正規軍編制を口實に百姓の鐵砲を取り揚げて都會の Proletariat<sup>プロレタリアット</sup>の手に集めなければならぬと云ふ所から、赤色軍の編制を主張しました、又苟も勞農政府を作つた以上は其金城鐵壁として立派な正規軍がなければならぬと主張しましたので、レニンはトロツキーに託するに赤色軍の編制を以てしたのであります、シテ、トロツキーは爾來二年間渾身の智囊を絞り精力を傾倒して赤軍編制に當り、その結果兎も角も相當武力のある兵力を作つたのであります。

赤色軍の士官を如何にして作りましたか、今迄の士官は彼等の政敵である、到底信賴することは出來ない、而かも兵卒の中には教育のある者が十分

に無い、そこでトロツキの按出したのは舊士官を採用して之れに労働者上り、又はコンミニユニストの兵卒を附けて監視する、それでまだ不安心の場合には家族の名簿を調べ家族をして士官に對する連帶責任を負はせるといふ亂暴極まる政策を採つたのであります、が此家族連座法には頑固な士官も大概參つて了つたのであります、それ迄は遁げ隠れも致しましたが親兄弟や妻子が迷惑するので、イヤでも應でもトロツキの命に服し過激派の爲めに盡くさなければならぬことになつたのであります、次にトロツキの苦辛しましたのは軍紀問題であります、何しろ過激派はザールの軍紀を破つた張本人であります、その破壊の張本人が今急に新軍紀の創設者にならうと云ふのですから頗る無理なことでありましたが、結局トロツキの按出しましたのは兵卒同志の連座法であります、即ち各部隊を五人か十人の連座團體に分ち其團中の或者が脱走でもするとあとの四人か九人が脱走した同僚の責を負ふて

罰を受けることになりました、そこでお互に目附けをやる監視をやることになつて、さしも紊亂した軍紀もいつの間にか又復ジリ／＼引締つて來たのであります、右の外に過激派はコンミニユニストから成立つて居る特殊部隊を作り、又獨塊捕虜や支那の苦力から國際大隊を作り、露國人から成立つて居るあまり信頼の出來ない部隊の目付役をやらせました、これで赤色軍士官も出來軍紀も張りましたので漸次相當の武力を持つやうになりましたのはどうも昨年の秋頃からのことの様に思はれます、私はユデニツチ軍に従軍してベトログラード攻撃戦に行きましたが、ガツチナと云ふ所迄往くと過激派軍が猛烈な逆襲を始めましてユデニツチ軍が急に退却腰となり、私はもう一晚彼處で愚圖々々して居りましたならば捕虜に成つたかも知れませぬと云ふ、危いところで時機を逸せず遁出して助かつたのであります、此の時私は始めて赤軍の武力を自ら實見目撃したのであります、赤軍は案外強かつたの

であります。而して赤色軍が本當に物に成つた深い原因は何かと研究して見ますと先きに申しました目付役でもなく、連座法でもなく、主として『赤色士官』の養成の結果であります。換言すれば過激派式軍事教育の力であり、トロッキーは赤軍編制の當初、労働者中の多少學問があり、氣の利いた者をもとの士官學校に入れて『過激派的』に養成しました。もとより赤色士官學校の卒業生は戰略上の智識は淺薄であります。兎に角過激派に忠實である様に教育したのであります。で此赤色士官が愈々軍隊に這入り初めると急に赤軍が強くなりしたのは矢張り教育の力の偉大なるを語るものであります。せんか、私が莫斯科を立つたのは去六月六日でありましたが、恰度其日は今期卒業の赤色士官が波蘭方面出征の日でありました。莫斯科全市はお祭騒をやつて彼等の首途を送つて居りました。シテ私がオムスクに着きました頃は即ち是等の士官が愈々戦闘に加つた頃だと思つて居りましたが果して赤色軍が

逆襲に轉じてキエーフを取還へしたと云ふ報道が來ました。即ち赤軍も矢張り教育のお蔭で愈々物に成つたのであります。申すまでもなくトロッキーが赤軍編制と同時に赤色士官の養成に掛つたと云ふことでも、如何に彼等の計畫が遠大で野心が深いかと云ふことが察せられるのであります。否單に士官の養成のみならず彼等が執權以來内政に於ても最も力を注いで居るのは教育であります。彼等の教育に付いての努力は私が『破天荒』と云ふ詞を使つても差支ないと思ふ程驚歎すべきものであります。唯だ彼の教育でも高等教育の方は今尚ほ混沌たるもので殆んど語るに足りませぬ。が普通教育、國民教育に到つては計畫實に彪大無比とも云ふべく且つ其計畫一部は已に斷行して居るのであります。過激派教育の中で最も注意すべきは産れてから十七歳迄の幼少年に對する教育と大人文盲の教育であります。露國はザール專制時代に倚らしむべく知らしむべからずと云ふ方針で、國民教育を等閑に附して居

りましたので、農民の大多数は文盲でありました、然るに過激派は過激派一流のタクチツクを用ひて、今盛んに『文盲』征伐をやつて居ります。

其の方法は都會に於ては軍隊式の強制教育で各工場の労働者中文盲のものは一定の時間一定の學校に集つて文字を習ふ、それに缺席したものは兵卒の脱走と同じ様に手厳しく罰すると言つた様なやり方でありまして、文部卿が私に話した所に據ると、ペトログラードはこの八月一抔に明盲目が一人も無くなることになつて居ると云ふことであります。

それから田舎では『誰でも字を讀み得る者は近所の字を讀めない者を教育する義務がある』と云ふて『めあき』と『文盲』と兩方を強制して教へさせ、習はせて居るのであります、て此の勢ひで行くと露國の文盲のパーセンテージが近い中に激減することは申すまでもありません、シテ從來文盲九十パーセントであつた露國でさへ北歐羅巴に於て一大勢力を成し列國が恐怖の的になつ

て居りました、其露國の國民が皆な字を讀み得るやうになりましたならば、たごひ過激派の手で教育されたとしても赤色軍の例もあり將來益々恐るべき國となるのであらうと云はなければなりません、又同時に過激派は一時的の野心でやつて居るのでない、遠大の計畫を以てやつて居るのであることも、這般彼等の教育に對する大努力に依つても明かに證明されるのであります。

最近の消息に依ると波蘭と赤露との戦局が一變して波蘭軍が盛返へし赤色軍が包圍されて退路を絶たるゝの危地に陥つたと云ふことであります、過激派軍が當初眞意に波蘭に進撃したときに、『愈々レーニンが世界政策を始めたのでないか』と云ふ説もありましたが、私が親しく莫斯科で研究した所に依りますると、勞農政府は今直ちに世界政策をムキ出しにやる考はなく、目下のところ骨休め政策であると思はれるのであります、が然らば赤色軍がナゼ波蘭に遮二無二に進むか云ふ議論が起るのでありまやうが、私の見る所赤色

軍がワルソウに進撃したのはレーニンの政策でなからう、恐らくは赤色軍の先鋒に加つた波蘭人の過激派がレーニンの言ふことを聽かずにワルソウに往つて天下を取らうとしたのであらう換言すれば波蘭過激派がワルソウを取らうとした政略が、赤色軍の軍略を支配したのでその結果、過激派軍が負け掛つたのであらうと思はれるのであります。五月五日モスコにて波蘭に對するデモンストレーションの大會がありました時波蘭過激派の領袖が出て熱烈な演説をして今度の戦争はワルソウの市街戦で勝敗を決しなければならぬ、と云ふやうな氣焰を吐きました、波蘭の過激派が此機に乗じてワルソウの天下を取らうと云ふ野心を起したのは無理もなく、流石のレーニンも彼等を制することが出來ず往ける處迄往こうと云ふことになつたらしいのであります。一旦政略が軍略を支配すると戦さは負けるに定つて居ります、赤色軍が最初勝つたのも今度負けかけたのも、過激派の内幕から言ふと當然の成行であ

ると云ふ外無いのであります、但だ今後の成行はどうなりますか、將來のこととは輕々しく豫測すべきではありません、波蘭戦局の如何に拘らず今後の露國が世界騒亂の中心になることは識者の意見の悉く一致する所であります、故に赤色露國の存在する限り、尠なくとも歐羅巴に在つては過激主義と資本主義は、間斷なく争ひを續けるであります、或は通商開始など一時的平和が保たれるかも知れませぬが、それは無論一時の事で、必ず後又騒亂が瀕發することは期して待つべきであります、たゞこの騒亂が今後どう云ふやうに發展するか豫言は出來ませぬ又すべきではありません、私が莫斯科で得ました材料を綜合して考へますと、レーニンは今差し當り英國に對して最も目を注いで居ります、どうかして英國をやつつけやうと思つて居ります、レーニンの本攻撃の正面として居るのは英國らしい、英國をさへ覆へせば他の歐洲列強は自から過激派の詞で申しますと赤くなるであらうと云ふ見當を附けて

居るのであります、而してレーニンは更らに英國に對する補助攻撃として近東及中東、即ち波斯、印度、アフガニスタン方面に向つて百方畫策を廻し特に、獨逸が戦争前に波斯、土耳其、アフガニスタン等に勢力を張つて英國を索制しやうとした當年の地盤を準備とを横取りし、又從來の獨逸派であつたエンウエルバシヤ等と提携して着々その歩を進めて居ります、それが爲英國は時折手を焼き、昨冬の如き印度西境でアフガニスタン軍と一時休戦條約を締結しなければならぬやうなこともありましたが、たゞ中東邊の事變は英國が極力秘密にして居りますので世間に傳はりませぬが、此の方面に於ける過激露西亞の勢力はザール露西亞の勢力プラスカイゼル獨逸の勢力でありまして誠に侮るべからざるものがあります。

以上のやうな形勢でありますから今後過激派を中心としての騒亂は近東、中東及西歐羅巴に向つて漸次擴がり行くことと思はれます、而して極東に於

てレーニンは非常に日本を恐れ緩衝國を以て日本の壓迫を緩和しやうと云ふ計畫であるらしいのであります、之に對して日本は如何なる政策を執るべきか、私が今回の歸朝の途次張家口から東日及大毎紙に電報を寄せて、皆さんの御意見を伺つたのは此の問題であります、即ち日本は此際過激派に對して積極的の行動を取らず、形勢觀望の態度を取り赤露對歐米の争亂中國力の充實を圖り國內の缺陷を改造して後日ボルシェビズムを中心としての騒亂が極東方面に廻つて來ても、それに對抗するだけの實力を今から準備して置く事にするか、或は又露國內政に干渉し英佛と力を合せて過激派を撲滅する積極政策を執るか、二策中どちらかを執らなければならぬと思ふのであります。何れにしても露國は世界争亂の中心になりますので、露國の研究は非常に重大の事と思ひます、私も新聞記者として今後も出来る限り職責を盡くす積であります、皆さんも亦慎重な態度で露國研究の爲めに努力せられんことを

326  
332

希望する次第であります。(拍手)

四〇

大正九年十月七日印刷  
大正九年十月十日發行

大正九年十月七日印刷  
大正九年十月十日發行

編輯者兼  
發行所  
關根齊一

印刷者  
堀直江

印刷所  
大國印刷株式會社

東京市麴町區內幸町一丁目三番地

發行所

日

露

協

會

電話新機(三九一)番  
三五〇番

18-11-21



終